

福永玄弥著 (明石書店、2025年)

性／生をめぐる闘争 台湾と韓国における性的マイノリティの運動と政治

嘉手川 玲*

本書は、大日本帝国が崩壊したのちの冷戦期に成立したナショナルな共同体である台湾・韓国をとりあげ、性的マイノリティの人びとを取り巻く政治とかれらによる実践が相互に規定・影響し合う過程を、公的資料・メディア報道・映像作品・フェミニズムや性的マイノリティの運動史・プライドパレードでのフィールド調査・インターネット上の言説などのデータをもちいて縦断的に記述した著作である。

プロローグでは、台湾では性的マイノリティの人権擁護が政策の主流に包摂され進展したいっぽう、韓国ではそれが十分に実現されないばかりかむしろ性的マイノリティの人びとがバックラッシュに曝されているという状況が紹介される。東アジアの性政治は、非規範的なジェンダーやセクシュアリティを生きた人びとの生の社会的な価値を、いかに／なぜ、時代や場所によって異なる形で高めたり切り下げたりしてきたのだろうか。この問いに、本書一冊をとおして執拗に取りくんだであろう著者の筆致には、迫力と説得力がある。

序論において著者は、性的マイノリティの権利獲得史に対する典型的なイメージを退ける。それは、抑圧から解放への歩みを想像する「直線的な進歩史観」と、米国に始まった運動が周縁世界へと伝播していく同心円的な広がりを想像する「帝国主義的・植民地主義的想像力」(22頁)である。

つづいて、類似した近現代史を歩んできた台湾と韓国を比較するという本書のアプローチが提示される。ここで特筆すべきは、冷戦秩序をジェンダーの観点から批判する冷戦フェミニズム研究の知見を導入し、東アジアの性政治を特定の国家の領域内に閉じることなくトランスナショナルに考察する立場を明らかにしたことだ。

本論は三部構成で、各部に、それぞれ台湾・韓国を扱う二つの章が配されている。

第一部では、冷戦期以来の軍隊史が紹介される。ここでは、徴兵制を、ホモソーシャルな国家・公的領域のメンバーシップを規範的な「男性」に保障する装置と捉えることで、軍事のみならず国家・公的領域全体に議論が拡張される。

第1章では、台湾の徴兵制の歴史のなかで、男性同性愛者について「従軍する権利」の言説と「従軍する義務」の言説が葛藤してきた過程が記述される。第2章では、韓国の軍刑法に含まれるソドミー条項の起源や適用過程についてつぶさに記述することで、冷戦下に構築された韓国社会のホモソーシャル性の性格が明快に照射されている。

第二部では、台湾・韓国の公共空間をめぐる性的マイノリティの人びとの運動が、それを取りまく政治状況や言説動向と関連づけて紹介される。

第3章では、台北のゲイ・バイセクシュアル男性が集う「ハッテン場」(154頁)であった新公園を「浄化」しようとした行政(174頁)に対する性的マイノリティの共同戦線が、アジア最大級のプライドパレードである「台湾同志パレード」(183頁)へと繋がっていく過程が、多くのアクターの間の交渉を視野に収めつつ記述されている。第4章でもソウルクィアパレードの事例が紹介されるが、相対する保守派による批判や行政の対応に注目することで、クィアパレードのラディカルな抵抗的性格を逆照射する立論となっている。くわえて第4章では、ソウル特別市児童生徒人権条例(203頁)の制定過程についても論じられる。ここでは、インターネットの普及によって可能になった青少年の社会運動が、性的マイノリティの運動と合流したという事例も紹介されるが、本章の議論においては枝道に追いやられた印象がある。

第三部では、性的マイノリティの人権において対照的な状況にある台湾と韓国について、国際人権言説のローカライゼーション・女性運動の主流

* 立教大学大学院社会学研究科社会学専攻修士課程

化・バックラッシュの組織化という点に注目し、こんにちに至る歴史的経緯が記述・分析される。

第5章では、台湾について、民主化過程での女性運動の主流化から同性婚の法制化に至る経緯がとりあげられる。台湾の国際的孤立がフェミニストと政党政治の「同盟関係」(286頁)を強化し、性的マイノリティの人権課題を包摂する政治が促進されてきたことが紹介される。そして、性的マイノリティによる婚姻平等運動が上述の条件下でいかに成功を収めたのか考察される。しかし、その過程で、台湾を性的マイノリティの人権擁護における「先進国」と位置づける「台湾ホモナショナリズム」(304頁)が成立したことや、運動がラディカルさを失い同化主義的なものに後退したことも、批判的に検討されている。

第6章では、国際人権規範に基づく性的マイノリティの人権擁護が韓国で停滞している背景が論じられる。韓国では性的マイノリティと主流派フェミニストの連携が成らなかったばかりか、プロテスタント右派を中心とした保守派と一部のフェミニストの共闘が成立したことが紹介される。プロテスタント右派による「従北ゲイ」(373頁)などのヘイトスピーチをとりあげることで、マクロな冷戦の文脈との接続がなされている。しかし、バックラッシュの実際の動員過程に対する検討には不足感がある。

以上が本書の内容であるが、とりわけ第三部では、東アジア——わけでも国際社会からの孤立に悩まされた台湾——のジェンダー平等政治が、国際人権規範を掲げるグローバルなネットワークへの参画に動機づけられていたことが示された。とくにポスト冷戦期において米国をはじめとする西側諸国が特権的地位を維持してきた「国際社会や国連」(286頁)に対する欲望に、東アジアの性政治が規定されてきた一面があるということだ。これは、筆者が序論で退けたはずの「帝国主義的」「進歩主義的」歴史叙述が、皮肉にもむしろ正鵠を射ていたことを意味するのではないか(もちろん、台湾・韓国に固有の形で闘争や社会との共在を志向してきた性的マイノリティ運動の道程を捨

象するわけではない)。

だが、このアイロニーは、本書の意義を損なうものではない。むしろ本書とかわる潜在的な問題圏の広さの謂といえよう。未清算の日本帝国主義・米帝国主義・冷戦秩序が、人びとの生を選択的に価値づけたり毀損したりしてきた東アジアの現状に憤る者は、誰しも本書から示唆をうけるはずだ(冷戦の^{キーストン}要石としておかれた米軍基地によって今なお生活・尊厳を危うくされる沖縄の人びとや、日ソ/ロ両国に翻弄されつづけた樺太残留邦人の人びとの苦境に対する、日本社会や東京政府の不作為を、評者は想起させられた)。

なお、韓国の事例については、筆者の立論の方向づけによって十分に論じられなかった部分もあるように思われる。第4章は、インターネットの普及がそれまで周縁化されてきた青少年(の性的マイノリティ)の可視化にあたえた好影響に言及しながらも、結果的にはクィアパレードによる大都市の物理的空間の占拠に議論を帰結させている。物理的移動性に制約のある者(青少年のみならず女性、障害者、高齢者など)を排除していないか、「地方」の文脈を捨象するメトロノーマティブな議論になっていないか、懸念される部分だ。

また、性/生の政治化の契機を、必ずしも物理的な空間に晒された身体にのみ求めずともよいのではないかと評者は考える。近年、身体に限らない多様な媒体を通じた当事者の主体化の過程が記述されている。例えば、武内今日子は、包摂的な「Xジェンダー」カテゴリーが形成される途上のTwitterや匿名掲示板に「身体のある方から『X』を切り離す傾向」(武内2025: 215)を見出した。身体を後景化するオンライン空間の性質がむしろ性の政治化を促進した事例といえよう。インターネット等を梃子に従来とは異なる形で性/生が政治化される過程への注目が、性政治にかんする議論を補足し、また深化させることが期待される。

参考文献

武内今日子, 2025, 『非二元的な性を生きる——性的マイノリティのカテゴリー運用史』明石書店。